



外国语言文学研究文库

樋口一叶作品研究

——以『暗夜』为中心

何涪嘉 著



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



外国语言文学研究文庫

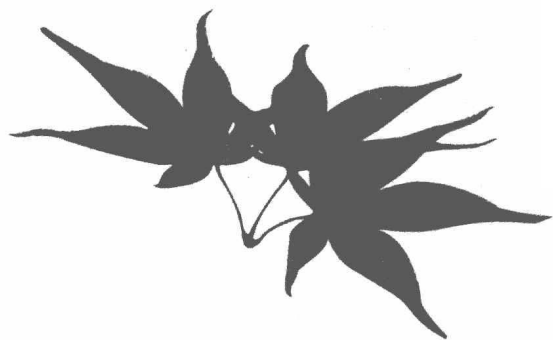
樋口一葉作品研究

樋口一葉作品研究

—「やみ夜」を中心として—

何涪嘉 著

上海交通大學出版社



内 容 提 要

本书围绕明治时代著名女作家樋口一叶的作品,尤其是其前期作品《暗夜》进行了分析解读。探讨了《暗夜》几易其稿的背景及其作品的深刻含义。通过考证题材来源,探索了其创作的目的与主题。通过与同时代其他作家、日本古典作品以及汉学的关联等的相关考证,揭示了作家的创作特色,并且对一叶的成长轨迹也进行了探索。对作家各阶段作品进行了整理归纳进而重新进行了定位。本研究对揭示樋口一叶创作巅峰的秘密具有一定意义。

图书在版编目(CIP)数据

樋口一叶作品研究/何涪嘉著. —上海:上海交通大学出版社,2010

(外国语言文学研究文库)

ISBN 978-7-313-06163-8

I. 樋... II. 何... III. 樋口一叶(1872~1896)—
小说—文学研究 IV. I313.074

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第 003431 号

樋口一叶作品研究

——以《暗夜》为中心

何涪嘉 著

上海交通大学出版社出版发行

(上海市番禺路 951 号 邮政编码 200030)

电话:64071208 出版人:韩建民

常熟市梅李印刷有限公司 印刷 全国新华书店经销

开本:787mm×960mm 1/16 印张:10.75 字数:201千字

2010年3月第1版 2010年3月第1次印刷

印数:1~1030

ISBN 978-7-313-06163-8/I 定价:27.00元

版权所有 侵权必究

前書き

純白無垢で可憐な水仙の花を目にする度に、樋口一葉のことが思い出される。一葉とは、誰もが魅かれる不思議な魅力を持った近代日本の著名な女流作家である。

一葉の魅力は恐らく勤勉に、健気に、何よりも真摯に生きる姿勢にあるのではなかろうか。才気溢れる美しい言葉使いもさることながら、その文章からうかがえる一葉の精神の力強さに、口ではなかなか言い表せない魅力を感じるのである。

一葉文学の強さは外見の美しさではなく、内面に備えてある。彼女の生きた二十四年間という短い人生の中で体験したことは、同年代に生きた普通の明治女性の人生より遥かに多くのことを経験してきたばかりでなく、人間の真実と真心を見抜く力を備えた鋭敏な人でもある。その上、何よりも一番すぐれた功績は、それらのすべての苦難を通して磨き上げた人間の真実と真心を見抜く力が、「たけくらべ」のような文学史上に名を刻む最高傑作を幾つも残してくれたということが出来る。このことが誰もが認めざるを得ない事実であろう。

思えば、一葉との付き合いは大学時代の卒論テーマとして選定して以来、かれこれもう20年以上にわたる。当時一葉を研究対象として選んだ動機は、その「悲劇性」と「古典美」的な部分に恐らく惹かれたのではないかと思われる。近年の一葉研究は、多くの研究者の努力により、いくつかの難題を乗り越えてきた。質と量においては飛躍的な成果を遂げたと言っても過言ではないほどである。

一葉に対する理解は年齢とともに深まる。一葉が内包した明治という時代性を反映しながら現代人に訴えかける問題は、これまで語られてきた「悲劇の女流作家」という視点だけでは捉えきれない深い広がりをもつ点である。錯綜複雑な一葉文学の研究のこれからに、そして現代によみがえる一葉の文学のために、小著がその指針のひとつを提示できたとしたらこの上なく幸いである。

最後に、立教大学客員研究員として研究中、懇切丁寧なアドバイスをくださった立教大学教授石崎等先生、博士課程在籍中から一貫して厳格にご指導をくださった甲南女子大学教授山根賢吉先生に感謝の意を表します。貴重な保存資料を利用させていただいた天理図書館にも、改めて感謝申し上げます。

樋口一叶作品研究

今回、人生の節目として、拙著を出した次第である。勉強不足で不適切な論点もあるかと思われ、拙著を読んで下さった皆様からのご批評ご叱責をいただければ幸いである。

作者

二〇〇九年 秋

目 録

序論.....	1
樋口一葉作品の研究現状	1
本論.....	3
第一章 早期作「やみ夜」の研究史	3
第一節 「やみ夜」位置づけに関する議論	3
第二節 作品論	7
第二章 「やみ夜」の本文検討	
——「やみ夜」の本文生成にはらむ創作上の諸問題	10
はじめに	10
第一節 「やみ夜」の未定稿	11
第二節 天理図書館所蔵の原稿について	12
第三節 原稿と本文の比較	13
第四節 「文学界」本文と「文藝倶楽部」本文	20
第五節 「文藝倶楽部」本文の刊行	33
おわりに	35
第三章 「やみ夜」のモチーフ	38
第一節 樋口一葉の社会的関心との関連	38
第二節 葉袋義一事件、井上角五郎事件及びその他との関連	56
第三節 モチーフ	60
第四章 古典文学との関連	
——「源氏物語」夕顔との関連	63
第一節 環境設定及び類似描写	63
第二節 言葉の使い方及び表現上の異同	66
第三節 主人公の設定方法	68

樋口一葉作品研究

第四節 中国の古典との関連	72
第五章 同時代文学との関連	
——露伴の「対鬪體」との関連	75
はじめに	75
第一節 主人公における身の上の接点	78
第二節 雰囲気作りの類似性及び女主人公への投影	82
第三節 筋書きにおける接点	89
おわりに	90
第六章 「やみ夜」の樋口一葉文学における位置付け	92
はじめに	92
第一節 人生転換へのきっかけ	93
第二節 「やみ夜」と他の初期作品との相違	110
第三節 「やみ夜」の位置づけ(結びに代えて)	112
第七章 一葉小説における「狂」と「侠」	
——「やみ夜」のお蘭を通して	115
第一節 姉対弟という構図	115
第二節 「悪人」との交渉が創作にもたらした暗黒部分	118
第三節 実生活と創作に見られる「侠」と「狂」	121
おわりに	124
第八章 漢文並びに中国典故との関連	126
結論	146
初出一覧	150
参考文献一覧	151
付録 1 樋口一葉作品一覧	153
付録 2 樋口一葉の年譜	155

樋口一葉作品の研究現状

一八九六年十一月二十三日、才女樋口一葉は輝かしい光芒をこの世から消した。当時のマスメディア(新聞、雑誌)が筆を揃えてその死を悼んだ。若死した一葉は惜しいことに、ちょうどその年の四月、「たけくらべ」を文藝倶楽部に一括発表し、「めざまし草」の露伴・緑雨・鷗外の合評「三人冗語」で彼女の文壇的地位が決定され、名声が絶頂に達したばかりの時期である。明治30年代の言論を先導した文学評論家である高山樗牛は「何ぞその来るの遅き、何ぞその去るの疾き」と哀悼の辞を述べた。言うまでもなく、樋口一葉のその彗星的な存在は今になっても、決して人々に忘れられることはなかった。

二〇〇四年、五千円札に登場して再び人々の視線に入った一葉は、どうしても「薄幸の才媛」、「悲劇の天才女流作家」としてのイメージが強いのではなかろうか。また近年フェミニズム批評、あるいはジェンダースタディーズの知見が共有されて来ると共に、今度は「語る女性」あるいは「女性の言葉の代表者」として共感を覚える作家となった。生前貧困だった一葉はご自身の「お札の顔」をどんな目で見ているだろう。もしかしたらまたその大きな近眼を開いて、皮肉ばい笑みを浮かびながら、人間喜劇を見ているような心境を抱いているかもしれない。ただし五千円札の発行で、一葉の研究に多くの方から更なる関心を集めたことに喜ぶべきことだろう。

一葉の生存と今とでは、女性を取り巻く社会情勢は大きく変化してきたばかりでなく、研究者の性別差にもその変化が著しく及んでいることが明らかである。一葉が生きていた時代においては男性の視線からどうしても珍しく好奇的に見られがち、また一葉研究の早期に、男性を中心とした一葉研究者に「女性作家」という枠組みの中でも見られがちである⁽¹⁾。つまり、一葉の人生においても研究においてもジェンダーの問題がはじめから存在していたことである。それも実は近年になってこういう事実を判明したのも藪禎子、菅聡子、関礼子たちのような女性研究者たちによる力が大きいであろう。女性研究者が男性研究者の目に見えない一葉をめぐる問題点を突き止めたのがまぎれもない事実である。言うまでもなく、今日における研究者層を見まわしても、男女という枠組みを取り払って、一研究者として何を言え

樋口一葉作品研究

るか、そうした力を問われる時代となったかもしれない。

先行資料を調査すると、一葉ほど詳しく調べ上げられている作家はいないのではないかと、言うほど資料が豊富である。和田芳恵編集(新世社一九四二年四月十五日発行)の一葉論を皮切りに、その後数々の一葉論が世に出され、その圧巻となるのは塩田良平著『樋口一葉研究 増補改訂版』(中央公論社一九五六年十月二十七日発行)であり、それをさらに補うかのような本が前田愛著『樋口一葉の世界』(前田愛著作集第三巻筑摩書房一九八九年九月三十日発行)である。それから近年、井上ひさし氏の「頭痛肩こり樋口一葉」、瀬戸内寂静氏「私の樋口一葉」と『炎凍る 樋口一葉の恋』(小学館)が力作であろう。瀬戸内寂静氏の著作は塩田良平氏の一葉論と異なる見解を示されていた。同じ作家としての経歴から人間一葉の核心に迫っていく感じがする。

「やみ夜」に関する資料を見る限り、橋口晋作氏(『「やみ夜」の性格、位置」一九九四年)、藪禎子氏(『透谷・藤村・一葉」一九九〇年)、北田幸恵氏(論文:「越境する女・お蘭——『やみ夜』論」一九九四年)、出原隆俊氏(論文:「『闇夜』の背後」一九九三年)、峯村至津子氏(論文:〈烈女幻想〉の揺らぎ——樋口一葉「やみ夜」再考二〇〇七年)などすぐれた論考がずらりと並んでいる。

「たけくらべ」に焦点を据えたに青木一男氏(『たけくらべ研究』一九七二年)をはじめ、山田有策氏、木村真佐幸氏、高田千波氏、蒲生芳郎氏、今西実氏、亀井秀雄氏、小森陽一氏、佐多稲子氏、関礼子氏、水野泰子氏、重松恵子氏、高良留美子氏、矢部彰氏もすぐれた論考が多い。ほかに野口碩氏、愛知峰子氏、岩見照代氏、木谷喜美枝氏、山根賢吉氏、山本洋氏、橋本威氏、岡保生氏、山本欣司氏(全部挙げるときりがないのでここで省略、ご諒解を乞う)は皆各方面において優れた研究業績を持つ先輩研究者として活躍なさっている。また森まゆみ氏、菅聡子氏『樋口一葉—(われは女なりけるものを)』は近年活躍なさっている女性研究者が多いことに一葉における研究者層の広がりを確実に感じていると共に、さらなる成果が期待される。



第一章 早期作「やみ夜」の研究史

第一節 「やみ夜」位置づけに関する議論

活字で発表された一葉の短篇小説の中、最秀作はいうまでも無く「たけくらべ」をおすべきであり、その次は「にごりえ」と「十三夜」「わかれ道」「大つごもり」などになるであろう。しかもこれらの作品は、すべて一葉終焉の地となった丸山福山町での創作である。つまり和田芳恵氏が指摘したように「奇跡的期間」⁽²⁾ 中での作品である。和田氏は続いて、この「奇跡的期間」をなす分水嶺は「大つごもり」であると指摘した。「闇桜」から「暗夜」にたどりつくまでの足取りは緩やかで、急に「大つごもり」から一葉独自の境地を開いてゆくと述べている。それは「やみ夜」と「大つごもり」との文学的価値の差があることと、「大つごもり」は一葉の作品の転換期であることとの二重の意味があることによると思われる。

ここでまず「やみ夜」の小説としての位置に関する論点を大まかに纏めてみた。

まずは、和田説を支持するのは猪野謙二氏である。猪野謙二氏は「日本現代文学史」の中で「一葉が始めていわゆる作家生活らしきものに入って、(中略)「大つごもり」以下の代表作を相次いで発表し始めるのは、明治二十七年五月本郷丸山福山町に移転後、それも主として翌二十八年から二十九年半ばにかけてのわずか一年余りのことに過ぎない」⁽³⁾と結論付けられている。

要するに、「大つごもり」を境として一葉が作家として成熟したと認めたところに両者の共通論点である。それは一葉研究のほぼ主流をなしてきたと言えよう。

それに引き換え、異論を唱えているのが関良一氏で、関氏は「やみ夜」を「文学に回帰せる一葉の再生の第一作である」という見方を取っている⁽⁴⁾。その説をさらに具体的に説明すれば、つまり、一葉の作品を次のように四期に分けられることができる。

第一期 明治二十四年まで(作家以前の時期)

第二期 明治二十四年初め～明治二十六年七月(作家の時期)

樋口一葉作品研究

第三期 明治二十六年七月～明治二十七年四月

第四期 明治二十七年五月～明治二十九年(『やみ夜』から『われから』までの期間)

上の第四期はまたは一葉の晩期とも言われている。『やみ夜』はその晩年の第一作とみなされているのである。

米倉巖氏は「一葉『やみ夜』の背景」⁽⁵⁾の中で同様な意見を提示している。つまり『やみ夜』を一葉が再び文壇に復帰した際の第一作で、しかも注目すべき作品だと評しているのである。

この事実は藤井公明氏の「一葉小説の文章」⁽⁶⁾で一葉の処女作『闇桜』から晩年の『われから』までの変化発展を、章句と語彙の面から調査をしていたが、その結果によると、『やみ夜』創作以前と創作以後では文章や語彙の面における大きな変化が認められる。それで『やみ夜』は見直されるべき作だと結論付けられた。

塩田良平博士が『やみ夜』を一葉の成長期の作と規定しているのには一理が有る。私は博士が三期分類を提唱した理由に注目したい⁽⁷⁾。

初期 明治二十五年『闇桜』から『五月雨』に至る期間

中期 明治二十五年末～明治二十七年『うもれ木』から『大つごもり』までの期間(成長期)

後期 明治二十八年～明治二十九年『たけくらべ』から『うらむらさき』までの期間(完成期)

したがって『やみ夜』は中期に属していることになる。

これについて、少し説明を加えよう。初期は一葉が半井桃水に師事していた期間で、作品は空想的であって、文章は王朝文学と徳川時代の擬古文を模倣しており、その表現は稚拙であり、題材は主として中島塾に求められていた。中期になると、作者自身は身の厳しい生活環境を直視しようと努める姿勢が現れてくる。そのため、現実的、写實的傾向が現れ、彼女独自の小説が形成され始める時期であり、成長期に入ったと言ってもいい時期である。

後期に入ると初期中期の欠陥ならびに未熟さが濾過されて、人生観照に深さを加えられ、現実的な世界に根ざした着想と写實的手法による表現が一葉独特の繊細の味も添えられるようになり、一種の風韻を含む流麗な文章に変化してきたのである。人生経験を多く作品化しようと、過去に住んだ土地から素材を求め、しかも成功したため、完成期と言える時期である。

塩田博士の説は素材と作品評価による分け方を取っているらしい。それに対し、筆者としては『たけくらべ』から後期に入れるというのはやや片寄っているかもしれ

第一章 早期作「やみ夜」の研究史

ないという疑問を抱いている。そこで、今井邦子氏の分け方に目を惹かれたのである。彼女は一葉小説二十五篇(未発表を含む)を取り上げて三分する説を取っている⁽⁸⁾。

前期作品

- 「かれ尾花」
- 「口口(無題)」
- 「闇桜」
- 「棚なし小舟」
- 「たま櫂」
- 「五月雨」
- 「うもれ木」
- 「経づくえ」
- 「暁月夜」
- 「雪の日」
- 「琴の音」

その時期の作品は、すなわち明治二十五年から二十六年十二月までの間にできたのである。ほとんど型にはまり、文章も古めかしく幼稚単純であり、生気がない作品ばかりである。

中期作品

- 「花ごもり」
- 「やみ夜」
- 「大つごもり」

前期の作に比べて相当の進境を示している。「空想的加工の作といへども悔りがたい複雑味を加へてきてゐる」と今井氏の論点を引用したい。

後期作品(明治二十八年～二十九年)

- 「ゆく雲」
- 「にごりえ」
- 「雨の夜」
- 「月の夜」
- 「十三夜」

「この子」

「わかれ道」

「裏紫」

「われから」

この間は作家としての力を社会的に認められた時期であり、もう模倣ではなく一葉独特のものと今井氏は評価している。

注意すべきことは、今井氏の説と塩田博士が共通している点は『やみ夜』を初期ではなく中期に入れたところにある。中期は一葉独自の小説が形成され始める時期である。塩田良平博士と同様『大つごもり』を中期に入れ、和田芳恵氏らと違う見解をしめしていることが分かる。

関良一氏に近い持論を持つのは森山重雄氏である。その説は塩田博士に対する反論と見てもよいであろう。明治二十七年七月から十二月まで、つまり『やみ夜』の発表時期について、その前後の一葉を、塩田博士は「この期間は、二十七年前半に続いて、一葉にとって心の虚無時代であり、挑戦的な生活態度、わるくひとずれのした時代であった。」⁽⁹⁾と述べたのに対し、森山氏はそれを逆にして、「この『心の虚無時代』こそ一葉の自己変革が行われた最も積極的、攻撃的時代として規定しなおした気がするが、今はその問題に触れたくない。いずれにしても、『やみ夜』は前期の一葉と後期のそれとを区切る重要な道標となった小説である。」⁽¹⁰⁾と述べている。

前田愛氏は森山氏の論文について「一葉の作品系列における『暗夜』の位置にはじめて正当な評価をくださった、優れた論考である」⁽¹¹⁾と高く評価している。

小池正胤氏は「樋口一葉を中心とした近世と近代」⁽¹²⁾でも同じ見解を示している。一葉の成熟を約束した時代だと言うのである。

橋本威氏の『樋口一葉作品研究』でも、森山氏の意見を支持しているようである。氏は「一葉の文学的転機は、一般に明治二十七年十二月二十九日以前脱稿の『大つごもり』に求められている。(中略)これは『暗夜』にかえるべきだとはおもうが、それは兔も角として、一葉が、職業作家として生活しえるという人生的転機を実感したのは、博文館との繋がりが強固なものとなって行った明治二十八年の後半だったと思われる。特に明治二十八年九月二十二日付発行『文藝倶楽部』第九編に発表された『にぎりえ』の文壇的成功が、一葉にそういう感じを強く与えたに違いない。」⁽¹³⁾と述べられている。

以上のように『やみ夜』に関する評価は次第に高くなってきたといえる。言い換えれば、むしろその価値が新たに見直されつつあるというべきかも知れない。

第一章 早期作「やみ夜」の研究史

上の各氏の論とは別に、言わば傍系とも言うべきものに、松坂俊夫の論を紹介したい。それは有名な「谷中の美人系」と「にごりえ系」という二大構想に分けられている論である⁽¹⁴⁾。つまり比較的初期作品群に見られる系統を「谷中の美人系」の構想とし、晩年の作品群に見られるものを「にごりえ系」の構想と名づける。「谷中の美人系」は「たま櫛」「経づくえ」「五月雨」「暁月夜」「琴の音」「やみ夜」、そして晩年の「われから」の一部にもそのイメージが及んでいるとするのである。

第二節 作品論

また作品論としては、発表後半世紀にわたって低調で不可解な作品だというレッテルを貼られたままである。

後藤宙外氏(「閨秀小説を読む」「早稲田文学」明治二十九年一月)が「やみ夜」を「黒ずんだる淵の底に、何とも分からぬ或物の、蠢めくを見る感」がする、その作品に対する暗さに注目していたらしい。

その中で、一葉の友人馬場孤蝶氏が一葉あて書簡(「ミつの上の日記」明治二十八年三月十七日)で一葉の宛名を「おらむ様」とし、終生一葉の良き理解者の斎藤緑雨氏が「泣きての後の冷笑」と、一葉とお蘭の間に通底するものを発見したのである。

湯地孝氏の作品論(『樋口一葉論』至文堂 一九二六年十月)も引き続きお蘭の「端麗な妖婦ぶり」を非現実的で、不自然とし、リアリズムの欠如を指摘し批評した。

「やみ夜」に対する評価を変えた論点としては関良一氏(『晩年の一葉』上・下『国語・国文』一九四四年六月七日)の「経世家一葉説」という見解に触れなければならぬ。「やみ夜」を「政治社会の頹廢に取材した本格的な社会小説」とし、晩年の一葉理解の鍵を握る「社会小説」と位置づけた。以後、「やみ夜」に関する論風が変わりはじめた。

その後、森山重雄氏(「一葉の「やみ夜」と相馬事件」、『日本文学』一九七一年四月)は、相馬事件にヒントを得て、明治政商的世界を批判する作品であり、後期作品への転換点に位置する作品だと述べた。

前田愛氏(「一葉の転機——「暗夜」の意味するもの」、『文学』一九七三年九月)は一葉の時世批判、破滅意識を独特の反世界構造によって表現し、後期作品に追求する暗い想念と通じていることを分析した。それは本格的な「やみ夜」論の提示となった。

樋口晋作氏(「「やみ夜」の性格・位置」、『樋口一葉 丸山福山町時代の小説 小論』文旦屋 一九九四年)は当世批判や「国家の大本」への志向を盛り込んだ観念小説と論

じた。

藪禎子氏(『透谷・藤村・一葉』、明治書院 一九九〇年七月)は女性研究者として鋭い論点を披露した。「やみ夜」は「国家の大本」に係わる自己の文学的力量的限界を感じさせた作品であり、「おおつごもり」以後は一葉の女ゆえの苦渋、閉塞感の意識化とかかわり、お蘭の登場でその重要なきっかけをもたらしてくれたと述べた。さらに「一葉文学の成立と展開——魔を中心に」(『藤女子大学国文学雑誌』一九七九年三月)では、二十七年以降の一葉文学が「魔」と「狂」を核として成立、一葉文学の成立と展開とは、その確認、自覚化の過程であると規定した。「やみ夜」こそ転機の作だと論じた。

北田幸恵氏(『越境する女・お蘭——「暗夜」論 新・フェミニズム批評の会編『樋口一葉を読み直す』、学芸書林 一九九四年)は、女性作家一葉の家父長制度からの越境の物語として捉え直したものである。直次郎はお蘭の代わりに実行する人となる。一葉かつての小説の師半井桃水の「胡砂吹く風」との関係についても論及した。

出原隆俊(『闇夜』の背後)、『日本近代文学』一九九五年五月)は政治小説や毒婦物との相違・共通点を言及、またお蘭、お蘭さまの呼称の変化が、女夜叉という意識形成過程とその示現とかかわっていることを指摘した。

以上研究史を振り返ってみるところ、研究者それぞれの立場と角度から『やみ夜』の位置付けや評価をしてきたが、いずれが最も的確なのか分析整理した上、トータルに『やみ夜』を論じていきたい。以上の論点を纏めていくうちに感じたのは、『やみ夜』は単なる初期や中期の作品に入れて済ますことのできない作品だと言う点である。言わば『やみ夜』は前期(或いは中期)と後期(完成期)につながる重要な鍵を握っている作だと思われる。言い換えれば、一葉のある重要な段階に創造した作品であり、その作品は重要な意義と秘密を持っていることはもはや否定できないだろう。しかし、意外なことに、この作品に関する研究は他の作品と比較すると、浅いばかりでなく、量的にも少ない、代表作としてあげられている『たけくらべ』『にごりえ』『十三夜』『大つごもり』『わかれ道』などについては調べ尽くされた感があるものの、しかも『闇桜』『雪の日』などの初期作品についての研究も少なくはない中で、一方、『やみ夜』についての論が極めて少ないのはなぜであろうかと首を傾げざるを得ない。和田氏は「『やみ夜』を末世的な政治に対する痛烈な抗議を持った社会小説であった。(中略)気負いだった力作であって、そのための失敗作だが」⁽¹⁵⁾という見方が代表するように、『やみ夜』は長い間、単なる凡作または駄作、失敗作などとして扱われ、闇の中に無視されてきたように考えているらしい。

第一章 早期作「やみ夜」の研究史

私は『やみ夜』は単なる凡作ではなくて、何らかの点において傑作につながる鍵を握っている作品だと信じ、そこで、その証拠を探すのに躍起になっている。以上の疑問点に探りを入れつつ、具体的な作業を本論で試みようという思いに至ったのである。

注釈

- (1) 小平麻衣「〈一葉〉という抑圧装置」(『埼玉大学国語教育論叢』平成14年・8) 小川昌子「変貌する『一葉』——明治三十、四十年代における『一葉』語りの諸相」『日本近代文学』平成14。
- (2) 『日本近代文学大系8 樋口一葉集』、昭和四十五年九月十日発行、角川書店
- (3) 『日本近代文学史(一)』、猪野謙二著、昭和五十四年六月二十日、講談社
- (4) 『樋口一葉 考証と試論』、昭和四十五年十一月二十日、有精堂
- (5) 『文芸広場』二十二巻、昭和四十九年八月号
- (6) 『一葉全集』第七巻所収「一葉小説の文章」、昭和三十一年六月二十日発行、塩田良平、和田芳恵編、筑摩書房
- (7) 塩田良平著「明治女流作家」『昭和女子大学近代文学研究室近代文学研究叢書』第三巻より引用、昭和三十一年六月発行
- (8) 『樋口一葉』昭和十八年六月十日再版、万里閣
- (9) 『樋口一葉研究』昭和四十五年十月、中央公論社
- (10) 「一葉の『やみ夜』と相馬事件」『日本文学』第二十巻四号、昭和四十六年四月
- (11) 「一葉の転機—『暗夜』の意味するもの—」『文学』第四十巻九号、昭和四十八年九月
- (12) 『日本文学』二十五巻、昭和五十三年、近代文学会出版
- (13) 『樋口一葉作品研究』、平成二年一月三十一日発行、和泉書院
- (14) 『増補改訂樋口一葉研究』、昭和四十五年九月十日初版、昭和五十八年十二月二十五日増補改訂版、教育出版センター
- (15) (1)と同じ



第二章 「やみ夜」の本文検討 ——「やみ夜」の本文生成にはらむ創作上の諸問題

はじめに

「やみ夜」に関しては、私たち研究者・読者に実は二種類のテキストが存在する。活字で流通しているのは、タイトルを「やみ夜」とし、「文藝倶楽部」本文を定本としている全集がほとんどそうである。代表として以下のものがあげられる。(年代順)

「一葉全集」一八九七年、博文館

「一葉全集」一九五四年、塩田良平・和田芳恵編、筑摩書店

「一葉小説全集第一巻」一九五七年、宝文館

和田芳恵氏『日本近代文学大系・樋口一葉』(一九七〇年・角川書店)

「樋口一葉全集第一巻」一九七四年、筑摩書房

「全集樋口一葉第一巻」一九七九年十一月、前田愛、小学館

「樋口一葉」二〇〇〇年、坪内祐之・中野翠編、筑摩書房

一番最新の口語訳として「一葉小説」二〇〇五年五月、井村小波、新風舎

タイトルを「暗夜」とし、初出の「文学界」本文を定本としている全集は近年になってようやく出現した。

「新日本古典文学大系明治編 24・樋口一葉集」二〇〇一年十月、菅聡子・関礼子、岩波書店

しかしながら、そうした複数のテキストの存在及びそれを念頭に置いた研究あるいは記述などはあまりにも少ないのが現状である。(関礼子氏⁽¹⁾がそれについて言及した論文がある。)本文の素性を知り、改稿での加筆削除を分析することを通して、作品の読解だけでなく、作家の手法・意図を考える上でも、ヒントになれるものが限りなく隠されている。複数のテキストを視野に入れ、もう一回書き手と読み手(改稿は読み手の立場)の視線を分析し、そこから新しい読みと解釈が生まれる可能性が十分期待できるはずだ。このような観点から、今回筆者はその基礎作業を通して、自分なりの解説と解釈を試みたいという思いに至ったわけである。

関礼子氏は上記論文で「暗夜」は同時代との関連や同時代他作品からの影響を指